

共同研究プロジェクト「「もの」の人類学的研究—もの、身体、環境のダイナミクス」
2009年度第6回研究会

日時：2009年12月12日（土）午後1時半から午後5時45分

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所マルチメディア会議室（304室）

発表者・発表題目：

- 1) 宮坂清（AA研共同研究員、独立行政法人国立病院機構高崎病院附属看護学校）
「身体から吸い出される「もの」—ラダックのシャーマニズム治病儀礼より—」
- 2) 丹羽朋子（AA研共同研究員、東京大学大学院）
「「もの」のゆらぎをどう捉えるか—中国剪紙（切り紙）を事例として—」

発表要旨は次ページより。

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

身体から吸い出される「もの」
—ラダックのシャーマニズム治病儀礼より—

宮坂清（国士舘大学非常勤講師）

キーワード： シャーマニズム治療、心霊手術、身体

心霊手術とそれに類するものについての人類学的関心は、身体から取り出された、あるいは吸い出された「もの」が担う意味には、ほとんど向けられない。だが、発表者が調査を行っているラダックの吸い出し治療で吸い出されるものは、その形状も担う意味も多彩であり、本発表ではそれを探る。

ラダックはインド、ジャンムー&カシミール州の東部、ヒマラヤーカラコルム山系中に位置する。東部にチベット仏教徒が多い。調査地域は、中心都市レーとその周辺。ラモ／ラバ（「女神」／「男神」）は、ラー（神）を憑依させ、主に病気治しを目的とした儀礼を行う。レーおよびその周辺にはほぼ毎日自宅で儀礼を行うラモ／ラバが複数いる。訪れるクライアントは10～50名、ほぼすべてが「吸い出し」を受ける。吸い出されるのは、黒っぽい固形物、液状物が多い。吸い出しを受けるのは胸部が多く、眼の周辺も多い。近代医学の手術への信仰、チベット医学の行う瀉血療法への信仰と、土着の精霊信仰や妖術信仰が習合したものか、あるいは寺院や村落で行われる悪霊祓いが影響しているか？ 吸い出されるものはティブと呼ばれ、「影」、「暗部」のほか、「ケガレ」を意味する。憑霊前にラモ／ラバは浄化儀礼を行い、儀礼中も場を清浄に保つことに気をつかう。

ラモ／ラバはしばしば「器」と呼ばれる。一般に人の魂が弱まると、外から他の霊が入りこみ、ゴンモ・ズグシェなど（巫病）になるといわれる。ラーは大気中に「風のように」漂っていて、口から入りこみ、背中、肩、あるいはニンガのあたりに留まるといわれる。悪霊もまた大気中をさまよっており、憑霊中のラモ／ラバはこれを吸い込まないように、正方形の布で口を覆う。ラモ／ラバを訪れるクライアントのほぼ全てが吸い出しを受ける。無言で患部を差し出す者も多い。だとすれば、ティブがあるということは、クライアント側が自ら感知しているのだと考えられる。ラモ／ラバはクライアントが感知したものに名を与え、取り除く。レーとその周辺以外の地域には、吸い出しを行わないラモ／ラバもいる。都市化が進み、クライアントの匿名化が進むにしたがい、吸い出されるティブの「もの」性が重視される？

ティブの形状と名は以下のとおりである。①黒い液体や固形物であればティブ、②金属片や針であればカプ、家畜の腹部から吸い出される、③紙片であればジャドゥ（呪術）。またティブが生成した経緯については以下のように説明される。①偏って摂取された飲食物（常識的、チベット医学的）、②飲食物や吸気を介して入った傷ついた精霊、③飲食物や吸気を介して入った他者の悪意。吸気や飲食物を介して口から入り、体内に溜まり、病いを引き起こす。ティブとの関連で最も引き合いに出される精霊ルーは、水場を汚したり、大地を傷つけることで傷く。傷ついたルーは呼気や飲食物を介して体内に入りティブになる。とくに、皮膚病、ハンセン病はルーに帰される。

以下のようにまとめることができる。「もの」としてのティブは、まず身体の開口部から取り出された、生理的な嫌悪をおこさせる穢れ（dirt）である。また同時に、観念的には精霊や禁忌への両義的な畏怖としてのケガレ（pollution）である。これらに、医学的に取り出される摘出物のイメージが重ね合わされて、「もの」としてのティブが想像される。ただし病者は、象徴的にというよりは、そのものとしてティブを感知し、食べることや排泄することに対する欲求に類似した身体的な衝動を感じる。

【参考文献】

Day, S., 1989, *Embodying Spirits: Village Oracles and Possession Ritual in Ladakh, North India*, Ph. D. thesis, London School of Economics and Political Science.

Dein, S., 1992, *The Management of illness by a Filipino Psychic Surgeon: A Western Physician's Impression*, In *Social Science and Medicine* 34(4), 461-64.

宮坂清, 2006, 「精霊の入るローラダックの巫者にみる憑霊と吸い出し」, 『アジア遊学』 84号 pp.123-33.

「もの」のゆらぎをどう捉えるか—中国剪紙（切り紙）を事例として

丹羽朋子（東京大学大学院 博士課程）

本報告は、中国・陝北地域における「剪紙」（切り紙）をめぐる〈人—もの—環境〉のインタラクションを事例として扱う。特に窑洞という居住空間における剪紙の使用と制作という局面に焦点を当て、その時その場の（状況固有的な）実践のなかに「もの」がいかにか立ち現れるか、その多様な在り方を示すことを通じて、「もの」の人類学的研究における新たな視角を提起することを目指した。

重ねた薄い紅紙に鋏で多様なかたちを切り出す「剪紙」は、黄土高原の窑洞暮らしにおける春節やハレの日を飾る実用品であり、吉祥祈願や魔よけの意味をもつ。ところが従来の研究において「剪紙」として扱われてきた「もの」はローカルな暮らしの文脈において一般化された名をもたず、用途に従ってそれぞれ異なる名称で呼ばれる。人々はむしろそれを鋏を使ってイメージ（花）を形に切り出す技術「鉸花」として捉えており、女たちが願いや思いを込めて切ることから、「女の心中の歌」とも称される。

一方、使用される局面に目を向けると、剪紙は貼られて時間がたてば壁に同化したかのように関心を持たれず、風雨や陽光で朽ちるままに放置される。だがこの物質性をもつはかなさがむしろ、「もの」としての剪紙が使い捨てと新調を繰り返す、儀礼などで繰り返される決まり文句の声と結びつくなどして、意味が（再）喚起される契機を生む。周囲の「もの」や環境（外光や気候なども含む）、使われる場での人の言葉（声）などと相互作用する過程で、自らを更新し、かたちを新鮮かつ持続させる仕組みがそこにはある。

制作に関しては「複製・模倣」と「創作」が、習得プロセスのなかで線的な連続にあることを論じた。作り手たちは他者や自身の過去の制作物を一時の底本としてアレンジを加えつつ自らのかたちを「創作」し、それが次の手本としてすり替わっていく。他者の好評を得たものは、村内の女性たちに共有され、代々継承されて、新たな変奏を生む源泉となる。技術的習熟の到達点でもある「冒鉸」は、思いのままにイメージをかたちに切り出す「即興的な創作」を可能とする技能であり、「対象の本質」を捉える観察眼や、象徴体系に通じた教養を要するとされる。これに対して本報告では具体的な制作過程を示しつつ、「紙に直接鋏を走らせる」という〈材料—道具—身体〉とのインタラクション、その偶然性を多分に含んだパフォーマンスそれ自体において、装飾の仕方やかたちが徐々に決定されていくことを示し、さらに生活の中にある制作が、同時進行で行われるさまざまな日常の実践とも相関関係にあることを示した。

また、表現としての剪紙の特徴は、音やイメージとして共有された言葉や歌、物語をソースとして、その時その場の状況に合わせて「改編」（変奏）を繰り返すことにある。作り手たちは、それを反復でありつつ、「同じだが違う」＝「創作」とみなす。剪紙はときに鼻歌やつぶやきと同時進行し、切り手自身の声が紡ぎ出す言葉や歌が、内容に加えてリズムや旋律によって自身の経験や感情と反響しあい、イメージの想起を誘導する。こうして「女の心中の歌」となった剪紙は、まさに「かたちあるイメージ」と「音としての言葉」がポリフォニックに響き合う判じ絵として、室内に貼られる。それは「言わなくてもわかる」表現手段であると同時に、必要に応じて対話を生む仕掛けともなりゆくものである。

このような剪紙の制作と使用は、農歴に基づく村の一年や、代々続いていく家族の人生のサイクルと結びつく。冬枯れの村に彩りを与える「窓花」や婚礼の「喜花」は、新たな年、新たな「人」の始まり、更新を告げるものである。それは、かたちに込められた言葉以上に、空間を赤く染める、というその「もの」としてのあらわれによって実現される。貼られた剪紙は再び朽ち、時折人々に時間の経過を知らせるが、そこに「剪紙」という「もの」の物質性や持続のあり方が顕在するのである。

本報告は剪紙や声といったある種の儚さをもつ「もの」の分析を通して、「もの」が形質の総体であり、

その物質性は常に知覚、認識されているというよりも、その時その場に応じて、ある種偶然、或いは反復・周期的なイメージとして現れるというアイデアを提起した。「もの」を対象とする研究は、「もの」に固定的な意味や価値があるという前提を放棄し、即ち「もの」に関する人の言説や、「もの」の移動による価値変容を取り上げるだけでなく、個別のより生成的な現象に寄り添うような研究手法を考慮する必要があるのではないか。このような観点から、日常（連続・ルーティン）の中にある変化（事例の中では一年のサイクル、日常生活に埋め込まれた制作、同じモチーフの繰り返しと「改編」など）を見ることで、「もの」が「おなじようで違う」ものとして持続していく、そのプロセスを考察する、という方法論の可能性について述べた。